

(7)

オピニオン

(第3種郵便物認可)

以前、カリブ海に浮かぶ「ハイチ」という小さな国に暮らしていたことがある。京都大助教授時代に留学したコーネル大から派遣された。西半球の最貧国、長く続いた独裁の国、感染症の宝庫、崩れゆく国。そんな名前の数々がつけられていた。失業率は70%を超え、国民の3分の2が貧困生活を送っていた。成人の10%がHIVに感染し、いまだ先天性梅毒で苦しむ子どもたちが後を絶たない。

そんな国で一人の日本人医師と出会った。須藤昭子さん。1927(昭和2)年生まれ。70年代以降、30年以上にわたってハイチで結核患者の治療にあたった。戦後、焼け野原となった兵庫県西宮市で、カナダから来た修道女たちが結核患者の治療にあたって



やまもと たろう
山本 太郎

世話をしようという人がいることに、とっても驚いたのよ」と、その動機を話してくれたことがある。

その彼女から約4年ぶりに手紙が届いた。

「お元気ですか。『ハイチのちとの闘い』を読みました。懐かしさでいっぱいです。大地君も5歳ですね。勤務先のサナトリウムでは2008年の12月8日にエイ

ハイチからの手紙

いるのを見て、当時、女子医専の学生だった彼女は結核専門医になることを決めたという。「こんな何にもない国に来て、それも当時一番恐れられていた結核患者のお

ズ患者の入院治療と結核多剤耐性菌患者のための病室の建設が終わりました。私年齢のためかひざが痛くなっています。まだハイチにいます。医者の仕事はもうして

いません。若者たちと植林に精を出し、農学校を計画中です。これが終わらないとハイチを後にできません。それまで健康で、と願っているところです。この手紙が無事に着きますように祈りながら。そして、さよなら」

最後に会ったころ、須藤さんは「食べ物がなくは何も始まらない。今は農作業に精を出している」と話していた。続けていたんだ、と思った。「あなたたち若い人は知らないかもしれないけど、私たち世代の人間にとって農作業は昔取ったきねづかなのよ。これでも戦時中は毎日、農作業をしていたのですから」という須藤さんの声が行間から聞こえてきそうだった。

(長崎大熱帯医学研究所教授)